Bブロックの「会話（形式指定）」ベスト3です。

形式指定の初トライは、会話のカタチで書いてください、というお題でした。あなたなら、どの作品を推しますか。

そして東工大生が1位に選んだのは・・・？

答えは作品のあとの講評にてどうぞ。

アイコンタクト

「(やばいな〜おばあちゃん俺の目の前来ちゃったよ…)」
「(あ〜疲れた。誰か席譲ってくれる人いないかしら。)」
「(うわ〜周りじろじろ見始めたよ。違う方見てよう。)」
「(あっ、目の前に若いいかにも元気そうな人いるじゃない。これは譲るしかないでしょ。)」
「(…俺見てるのか?周り年寄りの人ばっかりだし絶対そうだよな〜。)」
「(ん〜なかなか気付かないわね。)」
「(やっぱこれ絶対俺見てるよな〜…ちょっと見てみちゃおうかな。)」

・・・

「(あっ、目合っちゃった!)」
「(やった!やっとこっち向いてくれたわ。ふう〜やっと座れる。)」
「(やばいな〜譲んなきゃかな〜。…いやっ今日は部活で疲れてんだ。目そらしちゃえ。)」
「(あれっ?確かに目合ったわよね…?気のせいかしら。もう一回見ちゃおうかな。)」
「(ん?今そらしたはずなのにまた見てるよ。どうしよう?…譲っちゃうかな〜…いや、もう引き返せない!絶対譲んないぞ!)」
「(あっ、寝たふり始めた!さっきのもわざとね。よ〜しこうなったら見続けてやるわよ!)」

・・・

・・・

「(…あっ〜、やっぱ見られてるよな〜。しょーがない。ここまで見られちゃ俺の負けだな…譲ってあげよう。)」
「(ふ〜、やっと見たわね。結構手強かったけど、これでなんとか座れるわ。さあ早く話しかけてちょうだい!)」

「あの〜、席代わりま…」

「終点〜渋谷〜、渋谷〜終点です。」

「あっ……」

それはあるよく晴れた午後の話

それはあるよく晴れた午後の話

いつもの様に日課の散歩をこなしていると、同じく散歩中だったらしい友人と出くわした

「やあ、お久しぶり」

「おいおい、昨日会ったばかりなのに久しぶりはないだろう」

苦笑しながら友人が答える

彼と知り合ったのは約一ヶ月前、今日の様に偶然出会ったのがきっかけだった。それ以来何故かほぼ毎日この時間帯に偶然会うこともあって今ではすっかり意気投合した無二の親友になっている

「そういえばさ」

我が親友が話を切り出してきた

「昨日の夜、ずいぶん騒いでたみたいだけど何かあったのか？」

「あぁ、あれか・・・」

昨晩のことを思い出し、思わずしかめ面をつくってしまう

「昨日の夜はウチの父親がひどく酔っ払って上機嫌で帰ってきて、皆の顔に髭をな擦り付けてじゃれてきたんだ・・・」

あの視界いっぱいに髭面が広がって迫って来る光景はトラウマになったかもしれない

「一昨日は確か妹の方が好きなバンドの曲をフルボリュームでかけて踊ってたな」

「あれもやっぱり外に漏れてた？」

「当然、さらにその前の日は母親が物凄い大声で一時間くらい電話してただろ？　お前の家族って賑やかで結構変わってるよな」

朗らかに笑いながらこの親友はとんでもないことを言う

「そうかなぁ」

呟きながら僕は自分の家族のことを思い起こしてみる

ウチの家族は父親母親と長男長女、そして愛犬一匹の四人と一匹の家族である。普段は明るくて仲のいい普通の家族なんだけど・・・

「確かに新しい家族になった愛犬に映画の主人公の名前を付けたりしてる辺り、少し変わってるかもしれない」

「だろ？」と彼がわが意を得たりといった感じで笑いながら答える

「でも」

これだけははっきり言える

「どんなに変わっていても僕はあの家族が大好きだよ」

あの家族と暮らせて僕は幸せであると

「そうか」

いつしか彼の表情は満面の笑顔から落ち着いたものとなり、優しく僕を見つめていた

「じゃあ僕はこっちの道だから、じゃあね、今日も話せて楽しかったよ」

「おう、こちらこそいい話しを聞かせてもらったよ、また明日なボンド君」

そして二匹の犬はそれぞれの飼い主に引かれ、家に、家族と住む家に帰っていった。

それはあるよく晴れた午後の話

ダイアローグ

ボブ「やあ」

トム「やあボブ」

ボブ「何をしているんだい？」

トム「服を乾かしているのさ」

ボブ「トム、僕は君がまるで反復横とびをしているようにしか見えないよ」

トム「君にはそうみえるかいボブ。僕はただこの洗濯物を乾かしているだけなんだけどな。今夜のパーティーに必要なんだ。こうすればはやく乾くだろう」

ボブ「君が乾かしているのって、君が着ているその濡れたジャケットのことかい？おお、なんて愚かな男なんだきみは！乾燥機を使わないなんて！」

トム「なんだって？どうして君に指図されなくちゃならないんだ！僕には僕のやり方があるんだ、なにが愚かなものか！謝りたまえ！」

ボブ「だってそんな、そんなの馬鹿みたいじゃないか！」

トム「うるさい！侮辱だ。ああ、侮辱だよボブ。君とは絶交だ！」

ボブ「ああそうかい！望むところさトム。君とはお別れだ！」

ボブ「まったくおかしな男だよあいつは」

ジェニファー「あなただって電子レンジで服乾かすのやめてよ」

「会話」本選Ｂブロック作品講評

１　（にゃあ）　14位　1ポイント

　にゃあ、とかわいらしくまとまっていて、でも深読みも可能な作品です。
　ひょっとして授業中の会話があまりに難解だったりムイミだったりするという比喩なのかも、と深読みしてみたりしたのですが。

２　NO EXCUSE,NO LIFE...　10位　3ポイント

　言い訳しない人はいないはず。そこに着目したのがユニークでした。特に忘れ物の言い訳など、試用してみる価値ありでは？　（結果は保証できませんけど）

３　アイコンタクト　2位　9ポイント

　うん、あるあると共感できる日常の電車光景、テンポ良く心の中のセリフが繰り広げられて、きれいにオチへ。タイトルもすぽりと決まって、なかなかの仕上がりでした。特に（　）内のセリフがリアル。

４　姉弟　7位　5ポイント

　こちらのオチも心地よかったです。ラスト３行ですっきり、まさにセオリー通りの鮮やかさでした。
　お姉ちゃんてば、シュークリーム一個でやらせてたのは何の宿題だったんでしょうね。

５　学校帰り　4位　7ポイント

　語らなくても通じる思い。「・・・」だけで表情豊かにあらわしたワザがユニークで、特にラスト一行がうまく効いています。

６　変わって欲しくなかった　6位　6ポイント

　めまぐるしい展開にジェットコースターのように酔いました。お構いなしのK子さんに振り回されっぱなしの悲しい姿がコミカルに見えてきて、おつかれさま。
　で、作者さんに伺ったら「２割は実話」なんだそうな。。。「男三人」はフィクションだとか。

７　友人 12位　2.5ポイント

　だるい気分がナメクジという唯一の具体的なモノを通じて、じっとり伝わってきました。
　許し合った友人同士ならではの会話が、雨音にぽつりぽつりと。余情豊かな味わいです。

８　ある春の日、偶然の再会、偶然の別れ 15位　0ポイント

　自転車？　状況がよく見えなかったです。春の爽やかさは伝わってくるのだけれど。

９　それはあるよく晴れた午後の話 2位　9ポイント

　わーお、とラストですてきなドンデン返し。犬から見た家族愛、いいなあ、と晴れた午後のここちよさで読めました。

１０　ダイアローグ 1位　27ポイント

　TAさんは電子レンジがツボだったんだそうな。私は反復横跳び乾かしの奇抜さに笑えました。
　でも、イチオシフレーズで人気だったのは「やあボブ」でした。
　ともあれ、テレフォンショッピング風のコント会話が大受けで、首位＆イチオシフレーズ大賞同時ゲット、おめでとう！

１１　帰り道 4位　7ポイント

　いや、これはすごい筆力。お神楽の音が聞こえてきそうです。
　状況をほとんど説明していないのに、「行きはよいよい」と民話の残酷世界がうっすら立ち上がってきて、グレイト。

１２　世界で唯一の勝者の姿を映すもの 9位　3.5ポイント

　最後の審判のような一方的に問いつめてくる息苦しさが、じつに印象的で、理屈っぽいのですけれど、わからないなりに突き抜けてしまいそうな勢いのある言葉たちでした。

１３　だからこそ。 7位　5ポイント

　小学生の気分、給食を場面にうまく演出できているのです

が、でも小学生って、自分では「好き」ってあまり意識してなくて、何だかついつい意地悪しちゃう、っていう心の動きだと思うのですが、いかがでしょう、経験者の方々？。

１４　だいすき、きづいて　10位　3ポイント

「ちゅ」の甘さにぼろぼろです。
２日続けてカレーだったら、今日のほうがおいしいはず、ってそこはツッコミどころじゃないか……
カレーのことばっかり気にしていたら、横読み気づかなかったです、ごめん。

１５　会話ーぼくらの場合　15位　0ポイント

TAさんたちが仕掛けたこれでもかのベタ甘路線。ここまで行っていただくとお好きにどうぞと直視せずに通過するのが、オトナのたしなみってもんでしょうか。
問いつめてゆくうちに、エスカレートしてしまう女心、それでも言えないたったひとこと、まさに王道の展開でした。おしあわせに。

１６　「会話」　13位　2ポイント

コワイよー、お兄さん。一方的に語っている中から、どんどこどんどこ悲劇的な状況が見えてきて、せつない悲しい思いに襲われます。たぶん、彼も悲しい事実に気がついていて、認めたくないからこうして虚偽の語りで虚構を作ってるんだろうなあなんて、どんどんお兄さんに感情移入してしまう。すごい筆力です。ブラボー！
置き場が悪くて「殺しちゃったんだ、これ」という展開に気づいてもらいにくかったのが残念でした。